

令和2年5月22日

関係各位

熊本大学大学院生命科学研究部産科婦人科学講座
教授 片瀨秀隆

拝啓

歴史は繰り返される。第一次世界大戦中の1918年に大流行が始まったスペイン風邪では、日本の当時の人口の4割にあたる2千3百万人が罹患し、死者数は38~45万人であったと推定されています。COVID-19による百年ぶりの今回のパンデミックでは、世界的な公衆衛生や集中治療の劇的進歩によって桁違いで抑えられてはいますが、スペイン風邪の終息が2年後であったことは歴史から学んでおくべきことです。

この惨禍の中で日常と思っていたものの多くが激変してしまいました。4月末に東京開催が予定されていた第72回日本産科婦人科学会学術集会もそのひとつです。全てがWeb講演で、2週間以上にわたっていつでもどこでも視聴が可能であったからでしょうか、通常開催の3割増の1万2千人の登録があったそうです。私の現役最後の大仕事であった特別講演にも多くの方からメール、手紙やお電話で感想やエールを頂きました。その講演の中で紹介した米国の生物学者 Rachel L. Carson が1962年に上梓した『Silent Spring 沈黙の春』のテーマは合成化学物質でした。今回の未知のウイルスとは対象の違いはありますが、一瞬で狂ってしまったバランスが日常に戻るには途方もない時間と労力がかかることを彼女は予言しています。

「社会的距離」と翻訳されたソーシャル・ディスタンスという新語を頻繁に耳にするようになり、福沢諭吉のことを思い出しました。明治維新によって西欧の先進の文化や文明が怒濤のように流れ込み、和魂洋才の名の下に外国語が新しい日本語に翻訳されて行きました。そのことを強く意識したのが米国留学中の時です。「路肩」という日本語をそのまま2文字の漢字でみると不思議な気がします。しかし、英語ではshoulderであることを知った途端に納得しました。福沢が翻訳した沢山の英語の中にはsocietyがあります。最初に彼は「仲間連中」と訳し、やがて「社会」に落ち着いたと記録されています。「仲間連中との距離」、福沢の最初の感性が的を射ているように思えます。

6月と7月の予定表を同封致しました。非常事態宣言が熊本では解除されたことから、7月11日(土)予定の第234回熊本産科婦人科学会総会・学術講演会は広い会場に変更し、延期になった第233回とともに開催の方向です。子細は改めてご案内致します。

敬具